

実践報告 (Report)

室内遊びにおける保育環境の重要性(1)

—— 1 歳児の遊び場面での環境構成を考える ——

Importance of the childcare environment in the indoor play: Consideration of the environmental constitution in the play scene of the 1-year old child

松本 由美子*・後藤 知子*・小林 豊子**・石橋 尚子***
MATSUMOTO, Yumiko* GOTO, Tomoko* KOBAYASHI, Toyoko** ISHIBASHI, Naoko***

キーワード：室内遊び, 1 歳児, 保育環境, 動線, コーナー保育

Key words : Indoor play, 1-year old child, childcare environment, Line of flow, Corner of the play

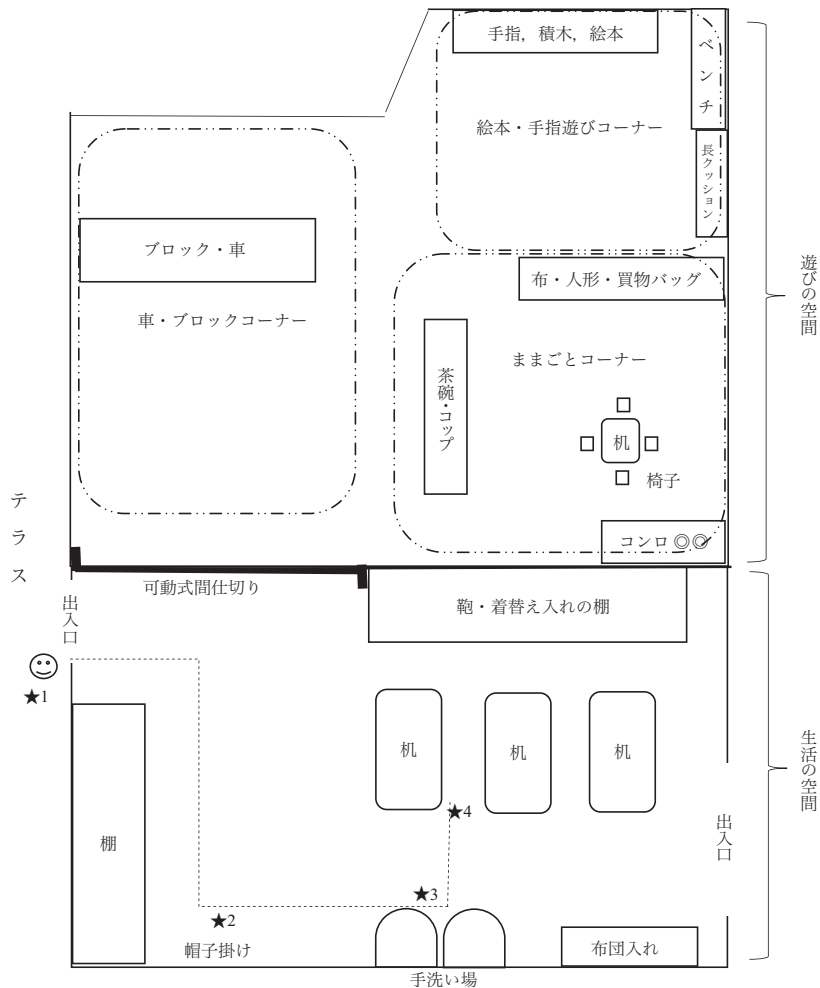
1. 研究の背景と目的

梶山女学園大学附属保育園は、開園して2年目を迎えた。開園当初より、「一人ひとりを大切にする保育」を目指し、実践を重ねてきた。その手掛かりとして、昨年度は「2歳児が主体的に生活習慣を獲得していく保育実践」をテーマに園内研修を行った。その結果、子どもが見通しをもって次の行動を選び、自分の生活をつくっていきける生活環境を整備することができた。生活環境を整える前は、保育士が、子どもの一つ一つの行為に声をかけていた。例えば、午前中の外遊びから入室し、給食を食べるまでに、子どもは靴や帽子を片付けたり、排泄に行ったり手洗いをしたりする等、たくさんのことを行わなければならない。その都度、保育士は、「○○ちゃん、こっちへ持って来てね」「帽子を片付けてきてね」と子どもに一つ一つ指示をしていた。そこで、保育室内を棚で区切って、食事と遊びの場所を分けるとともに、排泄、手洗い、食卓の場所に保育士がつくようにした。このようにしたことによって、子どもが見るだけで、次の行動がわかりやすくなり、自分で生活を進めていけるようになった。それとともに、保育士の指示が減り、子どもを認める言葉がけが増えていった。また、いつもとは異なった状況が発生すると子どもは不安になり、保育士もその対応で慌ててしまうことがあった。しかし、生活環境を整えることで、保育士が一人ひとりの子どもたちを温かい目で把握することができ、保育室は落ち着いた雰囲気になり、子ども達も主体的に生活ができるようになった。

今年度は、このような研究結果を踏まえ、0・1・2歳児全ての保育室で、食事と遊びの場所を分けて、落ち着いて生活できる環境を整えている(図1参照)。ところが、遊び場面に目を転じてみると、2歳児は比較的落ち着いているものの、1歳児にはおもちゃや場所の取り合いによるかみつきやひっかきが頻発していた。このようなトラブル

* 梶山女学園大学附属保育園 ** 梶山女学園大学附属保育園 園長

*** 梶山女学園大学教育学部／附属幼稚園 園長



- 註：☺ は子ども
 「」はコーナーの範囲を示している。
 ★1 テラスで靴を脱ぎ、靴箱に片付ける。靴下を脱ぎ、靴下入れに片付け、入室する。
 ★2 帽子を脱ぎ、帽子掛けにかける。
 ★3 手洗い場で手を洗う。
 ★4 自分のエプロンが掛けてある椅子に着席し、給食を食べる。

図1 1歳児みかん組の保育室全体図

ルを少なくしていくために、遊びの内容を考え、手作りおもちゃ作りにも力を入れ、質・量ともに充実を図ってきた。しかし、新しい環境に慣れてきた6月になっても、子どもたちは落ち着いて遊べない状況があった。

そこで今回は、1歳児クラスの子どもたちが、落ち着いて遊ぶことを目指して保育実践を行っていく。落ち着いて遊ぶとはどういう状況であるのかを話し合う中で、「子どもは自己活動を十分に満足できた時に、秩序と安定感が生じる（M. モンテッソーリ 1980）」というモンテッソーリの主張に目を留めた。私たちは、この自己活動を遊びと捉え、子どもが十分に遊べる環境を整えることで、子どもたちの中に秩序と安定感が生み出され、落ち着いて遊ぶことが可能になると考えた。

2. 実践対象クラスとその状況

今回実践対象としたクラスは1歳児みかん組14名（男児4名、女児10名）。0歳からの進級児が6名、新入園児8名のクラスで、担任保育士は3名である。

新入園児が進級園児より多いクラスであり、4月当初はクラスの雰囲気はどのようなものになるのかを予想することが難しい状況であった。そのため安全面に重点を置き、保育士の目が届きやすい空間ということに配慮した環境構成を行った。図2に示すように、保育士3名の位置は、子どもの動きにすぐさま対応できるように、保育士にとっても子どもにとってもお互いがよく見え、安心安全を確認できる見通しの良い配置であった。

このような環境の下で6名の進級児は、比較的落ち着いて生活をしていたものの、8名の新入園児は保育室や保育士になかなか慣れず、窓や入り口を見ては泣いていた。抱っこを求めて保育士の後を追っていたりして、居場所が定まらず右往左往していた。保育士も新入園児の個々の要求に応えるだけで精一杯であった。その落ち着かない状況を敏感に感じとった進級児も、自分に目を向けて欲しくて大きな声を出したり、おもちゃを投げたりして不安定な気持ちを表わすようになっていった。

6月頃になると新入園児が園生活に慣れたことで、進級児も落ち着いた。子どもたちは徐々に自分からおもちゃに関わろうとする姿に変わっていった。しかし、それと

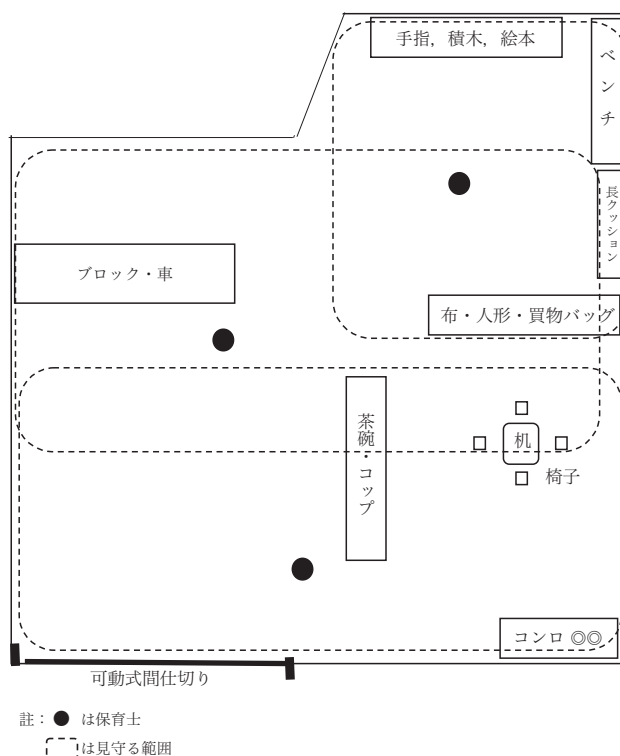


図2 4月当初の保育士が主に見守る位置

ともに部屋中におもちゃが散乱する、おもちゃを取り合う、目的もなく動き回るという姿が散見されるようになり、落ち着いてじっくりと遊ぶという姿とはかけ離れていった。1歳児期の子どもの発達的な特徴から、気になる物や場所をめぐる探索活動が活発になる時期ではあるが、目的もなくふらふらと動いているようであり、興味を持って物に関わるいわゆる探索活動とは違っていると思われた。

そこで、子ども一人ひとりが好きな遊びを見つけ、じっくりと落ち着いて遊ぶためには、この環境のどこに問題があるのかを話し合ってみた。

その結果以下の2つの問題が明らかとなった。

①おもちゃを持つての移動が多い

おもちゃは持っているがそれで遊ぶわけではない。歩きながらおもちゃをつかんで捨てたり、別の物を持ち歩き投げたりすることもあった。

②子どもが目移りしやすく気が散りやすい

保育士から見て保育室の見通しがよいということは、子どもにも見えやすく、他の子の行動が気になり、じっくり遊べず動き回ってしまう。絶えず動くので目に入ったおもちゃを取ろうとしたり、おもちゃ箱をひっくり返したりすることがある。また、保育士は子どもの動きに合わせて移動するので目まぐるしく動き、保育士自身も落ち着かない状態だった。子どもは保育士の後を追ったり、入り口の開閉が気になったりして遊びに目が向かなかった。

この2点に共通しているのは、子どもがひとところに留まらず始終動き回っていることであった。そこで、子どもの動線を記録し分析することで、なぜひとところに留まれないのか、どのような遊び環境を構成すればひとところに留まりじっくり遊び出せるのかを考えることとした。

3. 午後のおやつ後の室内遊びの状況と動線の記録：8月の記録

8月になってもおもちゃの散乱、おもちゃの取り合い、目的もなく動き回るという姿がなおも続いていた。とりわけお昼寝を終えたおやつ後の遊び時間は、本来ならお腹も満たされ気分よく遊べるはずの時間であるにもかかわらず、そのような状況が続いていた。なぜ落ち着いて遊べないのであろうか。この問題点を探るために、この時間の子どもの動きを担当以外の保育士1名が15分間観察し、その動線を記録した。表1に示すように対象とした子どもは14名中3名であり、H28年8月3日から8月8日の間に1人1回の観察を行った。

3名を抽出児とした理由は、1歳児からの新入園児であることと、ひとところに落ち着いて遊ぶ姿が見られなかったためである。A児は、落ち着いて生活ができるようになってきたものの、自分の好きな遊びを見つけることができていなかった。また保育士に誘われて遊び始めても長続きせず、常に指吸い行為をしてしまう姿が見られた。B児は保育室の人の出入りや保育士の動きを常に気にする姿があり、ひとところ

表1. 1歳児抽出児3名について

抽出児	性別	H 28.8.1時の月齢	調査日
A	F	2歳2か月	H 28.8.4
B	F	1歳8か月	H 28.8.8
C	M	1歳5か月	H 28.8.3

に留まって遊ぶ姿がほとんど見られなかった。歩き始めたばかりのC児は、部屋中を
気になるところに向かって動き回り、落ち着いて遊ぶ姿はほとんど見られなかった。

以上3名について観察し、その結果を記したのが図3-1（A児）、3-2（B児）、3-3（C児）である。

観察した結果、A児が絶えず動いていたのは、おもちゃを集めるためであった。図3-1に示すようにA児は、保育士に集めたおもちゃを持ってきては、また別のおもちゃを取りに行くという行為を何度も繰り返していた。途中では保育士と言葉のやり取りをしながらも、絶えず指吸いをして周りを見ていた。指吸いしながら自分が集めてきた人形を抱え込み、抱え込むことで満足していることがわかった。おもちゃを集めることに終始するのではなく、手にしたおもちゃを介して保育

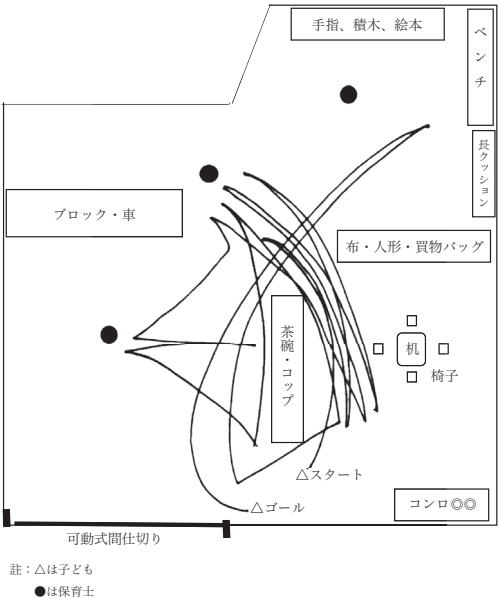


図3-1 8月のA児の動線

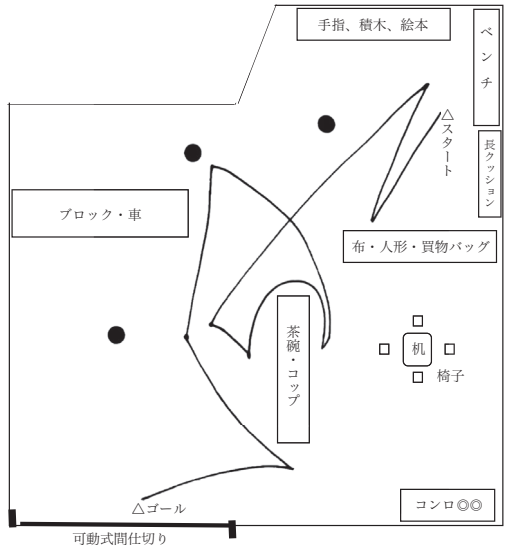


図3-2 8月のB児の動線

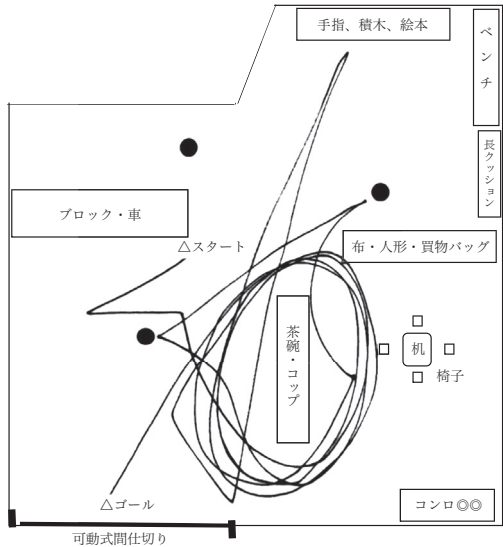


図3-3 8月のC児の動線

士や友達と関わり、じっくり遊べるようにしたい。

B児は、保育士や気になる場所にふらりと立ち寄るが留まることはなかった（図3-2参照）。立ち寄った場所で何かしらのおもちゃを手にとってみるものの、そのおもちゃで遊ぶことはなく、周囲をきょろきょろと見回して、また別のおもちゃを取りに行く姿が見られた。友達に興味はあるものの、一定以上近づかれると嫌悪の表情を表し、持っていたおもちゃで叩いてしまうことがあった。好きなおもちゃを持ってひとところに留まり、じっくり遊ぶ中で友達への安心感を持てるようにしたい。

C児は、図3-3に示すように、ままごとコーナーの茶碗・コップ棚の回りをにこにこしながら何周も回っていた。友達や保育士には近寄るが、全く興味を示さなかった。ぐるぐる回っているうちに、おもちゃが目につくと、口に入れてはすぐに投げ捨て、また動き出していた。体を動かすことに喜びを感じているようなので、動きの大きな遊びを楽しめる空間を保障したい。またおもちゃについては投げ捨てるだけでなく、ひとところに留まって遊ぶことができるようにしたい。

4. 午後のおやつ後の室内遊び環境の再構築と動線の記録：10月の記録

8月の記録に学び、子どもたちに充実した遊びを提供するために、高山（2014）を参考に8月半ばに遊び環境の再構築を行った。4月から8月観察時点までの遊び環境は、図1に示すように「ままごと」「車とブロック」「手指あそびと絵本」の3コーナーに分かれていた。3つのコーナーはどれも面積が広く、開放的なレイアウトになっていたため、気が散ってしまいおもちゃの散乱につながっていた。再構築後の遊び環境が図4である。

「ままごとコーナー」は次の4点に留意して変更した。①2つの入り口を棚の移動で狭めることで、ままごとコーナーと他の遊びコーナーとの区切りを明確にした。それによってままごと遊びに気持ちが向くようになった。②図1でブロックコーナーで使用していた両面使用の棚を、図4に示す人形・ベッド用の棚として使用することでキッチン遊びの反対側では、人形を使ったお世話遊びが可能となった。③キッチンは壁に向かって調理するスタイルに変えたことで、大人や子どもの視線を気にせず調理できるようにした。④食べ物そのものの形をしたおもちゃは一掃し、温かみを感じる素材のものやみたてが広がりやすい単純な色、形のものに変更した。

「車・ブロックコーナー」は、保育室の一番奥に移動し、出入りを気にすることなく集中して遊べるようにした。棚は片側から取り出す物に変え、箱の中に雑然と片付けられていた車は棚に並べて見やすくし、イメージを持ってすぐに遊び出せるようにした。

「手指あそびコーナー」と「絵本コーナー」は同じ場所に混在していたので、どちらの遊びも落ち着いて遊べなかった。手指あそびコーナーと絵本コーナーは分けることにし、「手指遊びコーナー」には、子どもたちの成長や発達に合わせた手作りおも

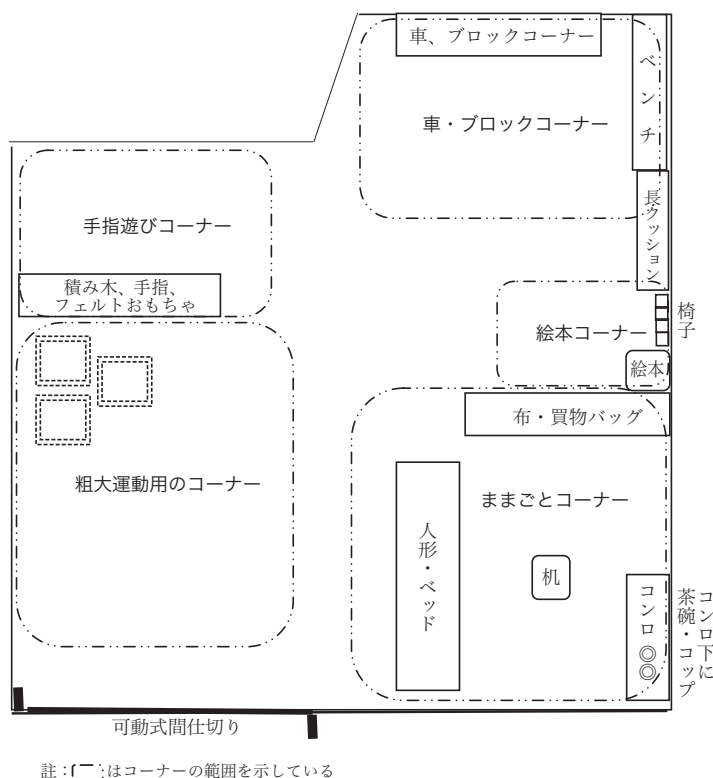


図4 10月の遊び環境とコーナー分け

ちやを増やした。「絵本コーナー」は棚に囲まれる形にし、絵本入れを設置して、並べた椅子に座って見るようにした。

さらに、体を動かしたい欲求に応じられるように、可動式間仕切り近くに粗大運動用のスペースを作った。そこには牛乳パックを利用し枠状の手作り大型おもちゃ（59×53×14cm）や、大きめの積み木（20×15×7cm）を用意し、動きの大きい遊びを促した。

新しい遊び環境に変えて1か月半が立ち、子どもたちがその環境に慣れた様子が見られるようになった10月に、再び抽出児3名の動線記録をとった。図1の鞆・着替え入れの棚の上に遊び空間側が記録できるようにビデオを設置し、15分間記録した。記録したものを担任1名が見て、その動線を記録した。調査日時はH28年10月3日、8月の調査と同様に午後のおやつ後の時間である。その観察結果を示したものが図5-1（A児）、5-2（B児）、5-3（C児）である。

A児は、好きなピンク色のままごとのジュースとコップを両手に持って、興味を持ち始めていたD児を追いかけて行き、人形・ベッド棚をくるくる回り始めた（図5-1参照）。しかし上手くD児とは関われなかったため、一旦保育士のところへ行き、気持ちを切り替えて絵本コーナーに移動した。絵本コーナーでは自分で選んだ絵本を一人でめくってみたり、覚えていた絵本の言葉を時々口ずさんだりしながら約6分間見

ていた。途中で他児が絵本に近寄ると「だめ！ Aちゃんの！」と言い、一人で絵本を見ること好み、邪魔されたくない様子だった。見終わると再びコップとジュースを持ち、D児が遊んでいたままごとコーナーへ移動した。今度はD児が受け入れたので関わることができ、ままごとテーブルに荷物を置き遊び出した。絵本やままごとなど自分の興味の持てる遊びが続いたので、盛んに見られていた指吸いは、この15分間に見られなかった。8月時点ではおもちゃを集めて満足するだけであったが、10月には好きなおもちゃが定まり、そのおもちゃを持って友達と関わろうとする姿まで見られるようになった。A児の興味の対象となったD児は8月生まれの女児で、言葉も

遊びも豊かであり、A児にとって憧れの存在なのではないだろうか。

B児はまず、D児をA児が追いかけて人形・ベッド棚の周りを回っていることに気づき興味を持ち近寄った（図5-2参照）。しかし、2人には上手く関われずブロックコーナーの方に移動した。ブロックコーナーで長方形のブロックを手にしたD児は、そのブロックを電話に見立て、しゃべる真似をしながら歩いていた。そこに絵本コーナーでA児の「だめ」と言った声を聞きつけて、B児も絵本コーナーに行き「だめよー」と言い、再び周辺を歩き始めた。一人でままごとコーナーで遊んでいるD児を見つけると、素早くままごとコーナーに行き一緒に遊び始めた。B児はD児と遊ぶこ

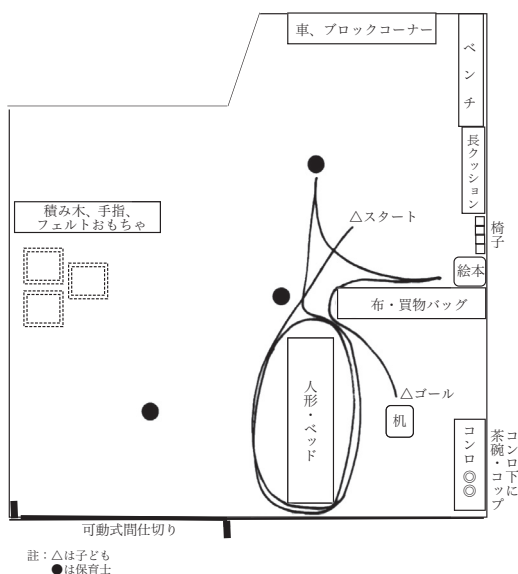


図5-1 10月のA児の動線

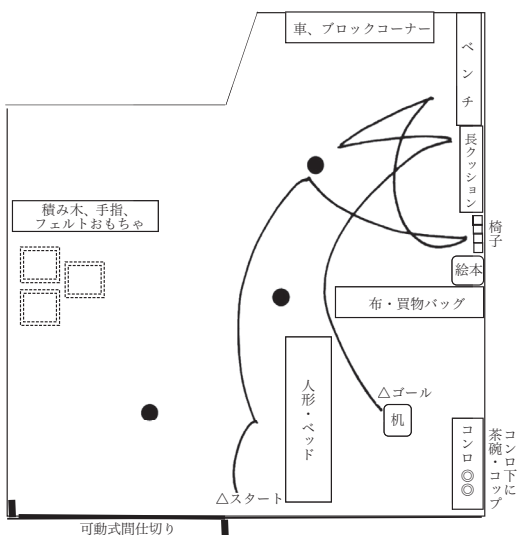


図5-2 10月のB児の動線

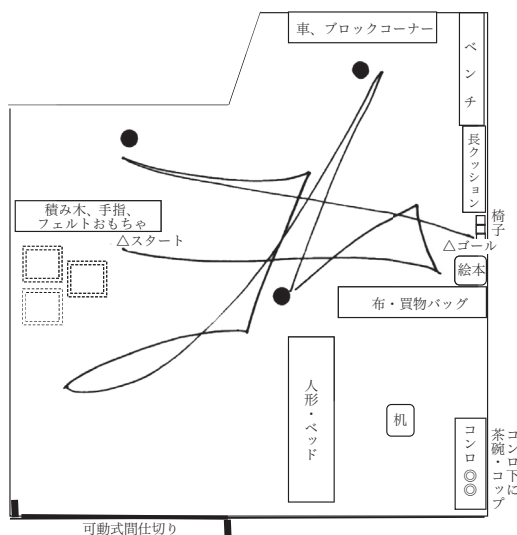


図5-3 10月のC児の動線

とが楽しくて、やり取りが約6分間続いた。そこにA児も加わるが、嫌悪の表情を見せることなく受け入れて遊んでいた。B児はまだ時折、他児に対する嫌悪の表情が表れるものの、D児以外にもおもちゃを介してのやり取り遊びが楽しめるようになってきている。

観察スタート時点で友達のお店屋さんごっこの様子を見ていたC児は、図5-3に示すように、観察開始後すぐに絵本コーナーに移動し、一人で車や動物の写真が乗った絵本をめくってみる姿が見られたり、絵本に出てきた乗り物を見て「ブーブ」などと片言でつぶやいたりしていた。また、友達のおもちゃを取ろうとする姿がみられたり、ブロックコーナーで手に持ちやすいブロックを取っては、はめてつなげようとする姿が見られた。一つの遊びが続く時間はそれほど長くはないが、興味を持ったおもちゃを見つけると座って遊び、また次の遊びに移動する姿が見られ、動き回るだけの姿が少なくなった。おもちゃを拾っては口に入れることは依然として続いていたが、よく観察すると遊びと遊びの間に持っていたものを口に入れていることが分かった。遊びが満足できるようになることで、おもちゃを口に入れることがなくなっていくのではないかと考えられる。今回の観察時点ではC児は粗大遊びコーナーで遊ぶ姿は見られなかったが、新しい環境に変えた時はすぐさま粗大遊びコーナーに行き、体を動かすことを十分楽しんでいた。8月時点ではおもちゃで遊ぶ姿が見られなかったC児だが、十分に体を動かし満足できる期間を経て、落ち着いて遊ぶ姿が見られるようになった。

5. 遊び環境の変化に伴う保育士の行動変容

10月のビデオによる記録調査では、保育士の動きの記録も取ることができた。8月は図2に示すように、保育士3名はそれぞれ担当するコーナーがあったが、子どものトラブルに着目しがちであり、子どもの状況に合わせて右往左往していた。そのため、保育士は広範囲にわたって子どもを把握しなければならず、落ち着いて遊びを展開することができなかった。それにより子どもも遊びに集中できず、落ち着くことができなかった。

図6に示すように遊び環境の再構築後は、子どもは自分の好きな遊びを保育士や友達と関わりながら楽しむことが増え、ひとところに留まりじっくり遊ぶ姿が見られるようになった。子どもがコーナーに留まることが増えたので、保育士もコーナーに留まり、遊びが充実するような働き掛けが可能となり、子どもも更に遊びが継続した。保育士は子どもの動きに振り回されることがなく、余裕を持って関われるようになり、子どもの思いも受け止められるようになった。

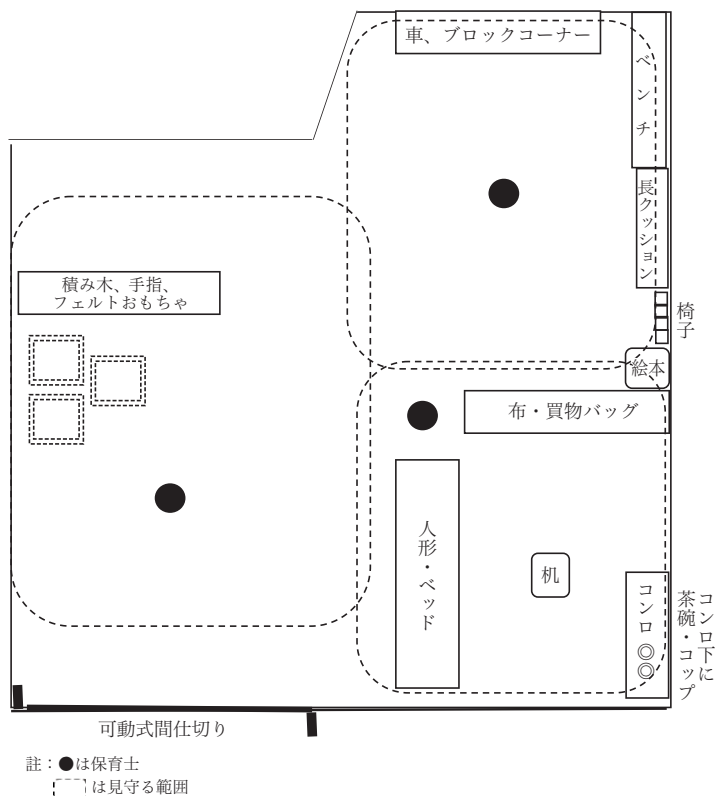


図6 10月の保育士の立ち位置

6. 全体の考察と今後の課題

子ども一人ひとりが好きな遊びを見つけ、じっくりと遊ぶためには、子どもの動線が大きく関係していることがわかった。子どもが必要以上に動き回らず、コーナーに一定時間留まって遊べるようになると、子ども同士の関わりが多くなり、遊びに継続性と広がりも見られるようになった。その姿は、落ち着いてじっくり遊んでいるように思えた。もちろん、ひとところに留まってじっとしていることだけが、落ち着いてじっくり遊んでいるということではない。しかしながら、今回の実践を通して、まずひとところに足を止め一定時間遊び続けることが、モンテッソーリのいうところの「自己活動の充実感がもたらす秩序と安定」に繋がり、落ち着いてじっくり遊ぶ姿を生み出すものになることが示唆されたものとする。

室内遊びにおける適切な保育環境の工夫は、子どもに自ら好きな遊びを見つけ、落ち着いて遊べるように促すとともに、保育士の気持ちにも変化を生みだした。保育士は、余裕を持って一人ひとりの子どもに配慮しながら適切な援助を行うとともに、全体の把握をすることができるようになった。保育実践は、子どもと保育士の相互作用で創られるものであることを改めて実感した。

引き続きA児、B児、C児に注目しながら、2歳児ぶどう組になる子どもたちのよ

り良い室内遊びの充実を目指し実践を重ねていきたい。

■引用文献

マリア・モンテッソーリ／林信二郎（1980）モンテッソーリの教育―子どもの発達と可能性―子ども
の何を知るべきか―，あすなろ書房

■参考文献

厚生労働省：保育所保育指針

名古屋市子ども青少年局，名古屋市保育ガイドライン

名古屋市子ども青少年局，保育をつなぐ―今，伝えたい保育の実際と工夫例―

高山静子（2014）環境構成の理論と実践―保育の専門性に基づいて―，エイデル研究所